

第9回「京都御苑ずきの御近所さん」

表千家 若宗匠

千 宗員 様



■千様は、同志社大学の他、英国バッキンガム大学も御卒業されています。英国に留学されたきっかけと、英国で研究された内容、また英国での一番の思い出についてお聞かせください。

同志社大学卒業後の進路を考える中で、一度外の世界を体験したいという思いがありました。いずれ茶道に関わらなければいけない立場でしたが、大学を出てすぐに家元の仕事に携わるのではなく、いろいろなものを見たり経験したりすることができればとの思いがあり、両親が後押ししてくれたこともあって、英国に留学することを決めました。

初めはウィンチェスター郊外にある語学学校で学び、そこで大学入学に必要な語学力を身につけて、バッキンガム大学に入学することになりました。

同志社大学では日本文化史を専攻していましたが、バッキンガム大学では「History of Art and Heritage Management」というコースを専攻しました。「History of Art」は主に美術全般の歴史を学ぶもので、「Heritage Management」は文化遺産をどのように管理するのか、すなわち保存や修復、公開といったことについて学ぶものです。そうした主に二つの柱を学ぶコースでした。美術史ではヨーロッパの美術史全般を、また英国の大学ですからイギリス国内の建築や絵画についても学びました。また、ベネチアルネッサンスを専門にしておられる教授についていたので、その教授のもとでベニスルネッサンス時代の建築や絵画についても学ぶ機会を得ました。実際に学校からの研修旅行でベニスに一週間ほど滞在し、現地で実物を見て学ぶこともありました。楽しかったですし、なかなか経験できない貴重な時間だったと思っています。

プライベートでは、中学時代の部活でテニスをやっていたこともあり、ウィンブルドンのトーナメントを生で観戦できたことが特に印象に残っています。その他にも、スポーツが盛んな国なので、ゴルフの全英オープンやサッカーの試合など、スポーツ観戦は楽しみの一つでしたし、今でもいい思い出として残っています。

バッキンガム大学は英国で唯一の私立大学で、いろいろな国からの留学生が学びに来ています。ヨーロッパ各国、日本をはじめとしたアジアの国々、中東からの留学生にも出会いました。各国の出身の人たちが集まって、それぞれの国のことを紹介するイベントを催す機会があり、日本出身の学生たちで企画した「Japan Night」というものも催しました。私は、留学中も日常でお茶を飲むために茶箱（携帯用の茶道具）を持参していたのですが、その「Japan Night」の際に、その茶箱を用いてお茶を点てて他の学生たちに振る舞ったこともあります。当時はロンドンに日系のデパートがあり、和菓子も準備できました。興味を持った学生もいて、いろいろと質問を受けましたし、「またお茶を飲ませて欲しい」と私の部屋まで遊びに来た人もありました。

約2年半という期間でしたが、日本という国を外から見るとよいきっかけになったと思います。イギリスも伝統や文化を大切にする国ですし、そのような伝統のあり方、あるいはそうしたものを受け継ぐ重要性を再認識できたことは、日本の伝統文化である茶道に携わる身として貴重な経験だったと思っています。

■千様の博士論文「近世前期における茶の湯の研究―表千家を中心として―」において、3代元伯宗旦の茶の湯の理念について、『一畳半という極小の空間で掛け物も花入も必要としない、最小限度の道具で構成されていた簡素な茶会にその理念を見出した』と述べておられます。粗相に徹した自然体の茶のあり方としてのさびは、千様のお茶に活かされていますか？千様の博士論文「近世前期における茶の湯の研究―表千家を中心として―」において、3代元伯宗旦の茶の湯の理念について、「一畳半という極小の空間で掛け物も花入も必要としない、最小限度の道具で構成されていた簡素な茶会にその理念を見出した」と述べておられます。粗相に徹した自然体の茶のあり方としてのさびは、千様のお茶にいかされていますか。

同志社大学在学中に江戸時代前期の家元（4代江岑宗左）を中心に卒業論文をまとめ、その後英国留学から帰国してからも継続して歴代の事績についての研究を続けていました。そうしたものを博士論文としてまとめ、2012年に同志社大学から芸術学の博士号を受けることができました。

博士論文では江戸時代前期から中期にかけて、3代元伯宗旦から7代如心斎宗左までの時代を扱いました。宗旦は、床の間すら排除した一畳半という極小の茶室を造り、実際にそこで、道具の取り合わせの中心となる掛け物も用いない、花も生けない、あり合わせの日常の道具を用いて茶会を催しています。実際に今の時代にお客様をお招きするにあたって、こうした茶会はなかなかできないかもしれません。それは宗旦の時代に千家が置かれていた状況があつてのことですし、今の時代には今の時代の茶のあり方があるのだと思います。しかし宗旦の自然体のお茶のあり方、あるいは理念的な部分は、今も受け継がれているのだと思います。

表千家の茶道は「淡々として水の流れるが如く」という言葉で表現されます。点前や所作について言及した言葉でもありますし、「自然体」でお茶に臨むように示唆した言葉でもあります。この言葉自体が誰の言葉なのか、いつの時代から言われているのかといったことははっきりしませんが、現在にも言い伝えられ、受け継がれている教えなのです。

私は今回の研究で、歴代が書き記した文書史料を用いて、江戸時代前・中期の千家茶道について実証的に研究し、とくに宗旦や如心斎の自然体のお茶の姿について論じました。しかしそれは実証するまでもなく、ごく当たり前のように今の時代にも受け継がれているものなのです。そうした自然体でのお茶のあり方は、当然今の私のお茶の中でも活かされているでしょうし、受け継いでいくべきものなのだと思っています。

私がこのように茶道史に興味を持って研究を続けているのは、たんに「昔はこうだった」ということを知るだけだけが目的ではありません。400年を超える千家の歴史の中では、時代の変遷の中で、それぞれの時代の家元がそれぞれの時代の茶のあり方というものを模索してきた、その結果として現在の千家茶道というものが存在しているのだと思います。そういったものを学ぶことで、「今の時代、これからの時代にどのように千家茶道があるべきか」ということを自分なりに見出すことができればと思っています。

■表千家のホームページ「茶の湯 ころろと美」に、茶の湯は「おいしいお茶をもって、主客ともに楽しみ、心を通い合わせることに大きな意義があると書かれています。日常生活で、茶の湯を実践するコツのようなものがあれば、教えて頂けますか？また千様御自身が茶の湯の実践のために、日常生活の中で気を付けておられることはありますか？健康を維持するために何かスポーツを続けておられるとか？

今回、このインタビューを受けようと思った理由に関連する質問です。時間的なこともあつてなかなか定期的にスポーツをすることができないのですが、できるだけウォーキングをしようと

心掛けています。そこで早朝に1時間ほどですが、時間のある時に京都御苑を定番のコースとして歩くようにしています。朝は人も多くなく、新鮮で清々しい空気を吸って、一日のエネルギーを与えられたような気になっています。

中興の祖と位置付けられる7代如心斎の言葉に、「茶の湯は常の事なり」というものがあります。日常においても茶の心を忘れないように、といった教えです。あるいは、お茶は決して特別なものではなく、日常の中に位置づけられるものなのだと取れるでしょう。

お茶というと「お稽古事」として作法や所作など改まった部分もあります。しかし日常の中で自然に一服のお茶を頂く時間があってもよいのだと思います。私にとっての日常のお茶というのは、家元の奥にあるお茶の間で、朝と昼に宿直の若手の内弟子が点ててくれたお茶を、家族や内弟子、職員たちで頂く、そうした時間です。きちんとした茶室ではなくただの奥の間で、長火鉢で湯を沸かし、使う道具もあり合わせの日常使いのもの、お菓子なども特別に用意するのではなく、稽古日や茶会で残ったものであったり、あるいは地方から来られた社中さんから頂いたお菓子であったり、その時にあるものを使って一服のお茶を頂く、そうしたものが自分にとっての日常のお茶であるのです。

一般の人であっても肩ひじ張らず、どこかでお茶を一服いただく時間を見つけて、また自分の気に入った茶碗などを見つけることができれば、そうしたものをういて一服点てて飲んでみるのもいいのではないのでしょうか。

■茶の湯の今後について、抱負を聞かせて頂けますか。

御先祖から受け継がれてきた茶の湯の伝統を肅々と受け継いでいく、これに尽きるのだと考えます。その上で、今のこの時代に、多くの人たちに茶の湯の心を理解してもらえたらと願っています。

今、海外の人の日本という国、あるいは日本の文化や伝統に対する興味は非常に高まっていると感じます。特に2020年の東京オリンピックに向けて、そうした機運はますます高まっていくのでしょう。また、オリンピック招致の際に「おもてなし」という言葉がキーワードになったように、日本人のおもてなしの心というものはこれからさらに見直されていくことと思います。

茶の湯は「おもてなしの文化」と言われます。一服のお茶を客にもてなすために、亭主は事前の準備から当日に至るまでさまざまな心遣いをして客をもてなす。客もまた、そうした亭主の心遣いを受け止めて茶会に臨む。こうした主客の心の通い合いがあって「一期一会」ともいわれる茶会の一座が成り立つのです。

「茶の湯」というものを通じて、そうした「おもてなしの心」についての理解を深めてもらえればと思いますし、それは決して外国の方だけではなく、現代の日本人にとっても必要なものと言えるかもしれません。茶の文化に触れ、理解を深めて頂き、今後ますます活発になるであろう海外の方々との交流に活かしてもらえればと考えています。

■千様の思い出の中で、京都御苑にまつわるものはありますか？

幼少の頃は家が近所ということもあり、前を通る機会もよくありました。「ここは昔天皇が住んでおられた場所なのだ」ということは、日常で自然に刷り込まれていたような感じがします。

同志社中学に通っていた頃はテニス部に所属しており、内御所や外御所をよく走らされました。走るのが苦手なので、その当時の私にとって御所は苦い思い出の場所です。

しかし今は、先ほども言いましたように御所をウォーキングすることで新鮮な空気を吸っていますし、自分にとってのパワースポットと言えるかもしれません。

また京都御苑は、千家の茶道史のうえでも大きな出来事があった場所です。天正13年(1585)

10月、閑白職に任ぜられた豊臣秀吉がその返礼として、御所で当時の正親町天皇に献茶の式を催し、千利休もその後見として参内しています。禁裏茶会（禁中茶会）として知られています。この当時、利休は「宗易」を名乗っていましたが、禁中に参内するにあたって「利休」の居士号を賜ったといわれ、これより後、「利休」を名乗ることになるのです。またこの時の茶会の様子を利休が記したものが家元に残されています。

■京都御苑で好きな場所、好きな時期などありますか？

御所は四季折々の楽しみがあると思います。今の時期だったら紅葉が綺麗ですね。ちょうど乾御門を入ったところで、銀杏の葉っぱが黄色の絨毯を敷き詰めたようになってます。春はいろいろな花が咲いていて華やかな感じがしますし、冬は冬で寒々しいですが身が引き締まる思いがします。

ウォーキングをする時は大体同じ時間帯に歩くのですが、朝の太陽の位置も季節ごとに違います。夏場であればもう高いところにお日さんが上っているような時間でも、今の時期だとまだ明けきっていなく少し暗く感じたりもします。季節の移り変わりをそういうところからも実感していますね。

御所の中は高い建物も電線も見えません。おそらくこれと同じ風景が何百年と変わらずに受け継がれてきているのだらうと思いますし、そうした京都の悠久の歴史を感じる場所でもあります。

■京都御苑の今後について、御意見などございましたら自由にお聞かせください。

特にありませんが、あえて言うなら、案内板のようなものが少ないような気がします。所々に全体の地図みたいなものはありますが、知らないと普通に通り過ぎてしまいます。御所の中には、いろいろなゆかりのある場所があるのだらうと思うので、その所々でそうした由緒や歴史についての案内があれば、御所を今以上に楽しめるのではないのでしょうか。

これからますます観光客が増えてくる中で、価値が失われないように、その空間をしっかりと守っていただければと願っています。

2016年12月1日 インタビュー
聞き手：田村省二、山本昌世

○千 宗員さま プロフィール○

1970年京都市生まれ。本名、千芳紀。同志社大学文学部卒業、英国バッキンガム大学修士課程修了。1998年、臨濟宗大徳寺派前管長福富雪底老師から、猶有齋の齋号を授かり得度、宗員の名を継ぐ。一般財団法人不審菴副理事長、一般社団法人表千家同門会専務理事。不審菴文庫長。著書に『近世前期における茶の湯の研究—表千家を中心として』（河原書店）がある。